

THE METAMORPHOSIS OF MR. SAMSA と 原作（「変身」フランク・カフカ）との比較

3217353 木山 瑞嬉

作品概要

原題 :The Metamorphosis of Mr. Sama (邦題 :『ザムザ氏の変身』『変身』)

監督 :Caroline Leaf (キャロライン・リーフ)

9 分 42 秒、1997 年、カナダ NFB 製作 ガラスの上に砂を敷き、下からライトを当てて表れる濃淡を用いて描いたアニメーション

内容

グレーゴル・ザムザはある朝目覚めると、自分の体が大きな虫の姿に変身していることに気づく。その不気味な姿から家族や会社の支配人には恐れられ、自室にこもって息をひそめながら暮らすようになる。ある晩、妹の弾くバイオリンの音につられてベッドから這い出たグレーゴルは、そのぎこちない演奏をドアの内側からじっと聴き入る。

原作 :Franz Kafka 『Die Verwandlung』 (フランツ・カフカ 『変身』)

1915 年のドイツの月刊誌「ディ・ヴァイセン・ブレッター」10 月号に掲載され、同年 12 月にクルト・ヴォルフ社 (ライプツィヒ) より「最後の審判叢書」の一冊として刊行された、中編小説。ある朝目覚めると巨大な虫になっていた男と、その家族の顛末が描かれた物語である。全体は 3 つの章で構成されており、1 章目に変身してしまったグレーゴルとそれを発見する家族、2 章目には部屋に閉じこもって生活するグレーゴルと家族との関係、3 章目には変化していく家庭状況とグレーゴルの死が描かれており、それぞれに番号が割り振られている。

また、当時のカフカは役職と父の仕事を手伝いながら執筆を行っていた。昼間は役員、夜に小説執筆というスタイルは、キャロライン・リーフが本作を制作していた当時、昼間に『The Street』(1976 年)を作り、夜の空いた時間に家でこつこつと本作を作っていたというエピソードと重なる。

原作（フランツ・カフカ『変身』）の大まかなストーリー構成と、 アニメーションに使用された箇所（四角内）

第一章

グレーゴルは、ある朝目覚めると体が虫になっている
姿が変わったことへの驚きよりも、仕事に対する嫌悪感がこみあげる

家族、部屋の各方面からノックして様子をうかがう

グレーゴル、起き上がろうと体を動かす
支配人が訪問してきたベルの音に焦り、カーペットから飛び降りる

支配人、ドア越しにグレーゴルに話しかける
グレーゴル、反論して話しまくり、やっとの思いでドアを開ける

グレーゴルが扉の外へ出て行くと、家族、支配人が驚き叫ぶ
支配人は逃げ帰り、父に追い払われるように部屋へと戻る

グレーゴル、暗い部屋の中で、長い眠りのあとに目を覚ます
パンの浮いた牛乳が置かれているのを見つけてありつくが、全くおいしくない
ベッドの下で今後について考える

第二章

妹、明け方に試験的に様々な食材を並べる
腐りかけのものがおいしいことが判明する

グレーゴル、部屋の外の家族の生活に聞き耳をたてる毎日
かつてのグレーゴルの収入の話や、妹思いの企みがあきらかになる

グレーゴル、変身から1ヶ月が経過し、体の扱いに慣れる
妹、母親、グレーゴルが動き回り易いように部屋の家具を運びさる
グレーゴル、絵画だけは守ろうと姿を現し、母親は気絶する

父、状況を重く見てグレーゴルにリンゴを投げつける
リンゴが背中に刺さり、グレーゴルは失明する

第三章

新しく召使いが雇われ、部屋の一室は3人の紳士たちに貸し出される

ある晩、妹が紳士たちや父母に向けてバイオリンの演奏をはじめる

音楽に聞き入り居間に身を乗り出したグレーゴルを見て、紳士たちは激怒し、家を去る

家族、我慢の限界がきて本心を吐露する

部屋に戻ったグレーゴルは、その場で息絶える

翌朝、グレーゴルの死を知った家族は喜びや安心、錯覚のような微かな悲しみを抱き、
その日を休息日と決め、電車にのって出かける

本作「ザムザ氏の变身」と原作「变身」の比較

構成の違い

原作では登場人物がグレーゴル、父、母、会社の支配人、召使いの大女、3人の紳士たちであるのに対して、アニメーションではグレーゴルの他、父、母、妹、支配人のみが登場する。また、原作のストーリーでは虫になってしまったグレーゴルのその後数日の生活や家族との関わり、家庭状況の変化、最後に息絶えるまでが描かれているが、本作では变身から数日の出来事や死にゆくシーンは省かれ、妹が弾くバイオリンにドアの内側から耳を澄ませるシーンを最後に締めくくられる。よって本作には原作の第一章と第二章の序盤における出来事や、第三章のバイオリンのシーンのみを抜粋していることがわかり、ボリューム的には原作のストーリーの約半分未満の内容を抽出し構成していることがわかる。

キャラクターの具体的な説明がない

原作における設定では、主人公のグレーゴルはもともと外交販売員であり、出勤時間の早すぎる毎日に辟易としている。物語の序盤には自身の体が虫になってしまったことへの驚きよりも、仕事に対する不満のあれこれが多く描写されていた。しかし本作においては、物語の始まる前に「When Gregor Samsa awoke one morning at home he found himself in his bed monstrously transformed.」（グレーゴル・ザムザはある朝目を覚ましたとき、自分の体がベッドの中で变身しているのを発見した。）という説明文が入った後は、特にこれといったナレーションがなく、動きと環境音、家族のセリフのみによって物語が進んでいく。砂の影によってシルエット的に描写される風景やキャラクター、砂が流れていくようなメタモルフォーゼによる場面展開は抽象的な世界観を生んでおり、鑑賞者側の個人的な想像をかき立てる効果がある。

原作をもともと読んでいる、知っている人と本作において初めてこの物語と出会う人とは少し違った世界観を感じ取るだろう。一方原作「变身」の初版が出版される際の表紙絵について、カフカ自身が「虫そのものを描いてはいけない」、「遠くからでも姿をみせてはならない」と注文を付けていたというエピソードからして、虫に变身してしまうということ自体に多様な解釈を求めるかのような意図が感じられる。本作におけるキャロライン・リーフの砂絵による抽象的な世界観は、抽象的であるからこそ誰しもが自身の経験や記憶に引き寄せて鑑賞することのできる作品であり、カフカの意図を彼女なりに反映させた結果の上に成り立ったものとして解釈することもできる。

家族との関係性の描写について

原作においては、グレーゴルとその家族の間に関係性については具体的に説明が成されていた。例えば、グレーゴルは一家の借金を返済するために1人で働きに出ていることや、両親や妹に十分な暮らしぶりを与えていることをまんざらでもなく誇りに思っていること。特に兄として常に特別な好意を示してくる妹に対しては、その音楽的な才能を認め、翌年に音楽学校へ入学させてやることをひそかに企画するほど、愛情を抱いていた。作中では、虫になってしまったグレーゴルが家族に対して迷惑をかけまいと、考えを巡らせたリ試行錯誤をしたりする描写や、実際に家族と接し、時には傷つけられてしまうといった出来事が発生する。しかし本作においては、そのほとんどの出来事が削ぎ落とされる。その代わりに、グレーゴルが見ている光景として描かれるものが、その関係性をわずかに物語っているようにも見える。グレーゴルの家族に対する視線を描いた箇所として印象的なのは、虫になったグレーゴルが初めて家族の前に姿を現した際に母親が両手を何度も握り直す、癖のような仕草を描いたところと、妹のバイオリンの演奏を聴きながら縫い物をする母親の手が大きくゆったりと描かれたところである。こういった母親の何気ない仕草に対して、少々不自然なまでに印象的に描かれていることから、グレーゴルが幼い頃から幾度も見てきたなじみ深いものとして、自身の記憶を重ねて見ているかのように受け取ることができ、母親に対する愛情の眼差しを感じることが出来る。また、妹がバイオリンの演奏をしている光景の描写として、決して上手であるとは言えない、不器用な音色に反応して身を乗り出しじっと聴き入る様子、またその選曲がルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンの「エリーゼのために」といった、愛する者に対する様々な感情を想起させるような曲であることからしても、グレーゴルの妹、また家族に対する思いを代弁するようなシーンとして、家族との繋がりを暗に示す部分であると言える。

主人公の描き方の違い

原作においては、主人公のグレーゴル・ザムザの視点から、彼の心情や考えをベースにして物語が語られてゆくのに対し、本作においては客観的な第三者（神）の視点で観察するかのように、一連の物語が描かれていく。これによって原作と本作において最も際立ってくる違いは、主人公である虫の捉えられ方である。原作では、例えば第一章でドアを開ける直前に待ち構える支配人に対して自身の状況を必死に説明するシーンがあるなど、全編を通して主人公の心情が説明される。なので読者は虫になってしまったグレーゴルの心境を把握し、彼の視点から物語を読み取っていく。これに対して本作では、虫は何も言葉を

発することがなく、体の動きや行動のみが描かれていく。時に漫画的表現のような目が心理描写として表れるが、多くのシーンでは黒いシルエットによって潰れている、もしくは無機質な昆虫の目として描かれる。現実の虫と人間とが心を通わせられないのと同じように、彼が何を考えているのか分からない謎の生物のまま提示され、彼の心境を深く把握させない。鑑賞者は彼を取り巻く環境からその心情を読み取ることしかできない。それによって、物語の大半の部分までは、ある意味家族の立場と同様に、主人公は不気味な存在として鑑賞者側に印象づけられる。一方、終盤に妹が演奏するバイオリンをドアの内側からじっと聴き入るグレーゴルのシーンにおいては、彼の身体のディティールをじっくりと写し、その耳の奥へと響く「エリーゼのために」の音色とともに迫る彼の息遣いが描かれる。心情が分からないからこそ、一体どれほどの感情がその内側で渦巻いているのか、といった果てしない予感を感じさせ、それまでに彼の身に起きた出来事や彼が受けた仕打ちを顧みてしまうような、相乗的な効果を果たしている。ここで描かれるグレーゴルの耳が人間のものによく似た形をしていることも、鑑賞者に人間として解釈されることで急激な感情移入を促す効果に繋がっていると考えられる。

・世界観を抽象化することで謎めいた部分をあえて提示し、鑑賞者側により自己に親密な記憶を想起させること、
・何気ない人物の仕草や音楽の響きにより家族の強い繋がりを感じさせること、
・主人公をあえて意志の通わぬ虫として描き、その中で渦巻く心情を鑑賞者の想像に委ねること、
以上をキャロライン・リーフの制作意図として挙げた。本作では原作の約半分以下の内容が短編アニメーションに反映されているものの、そこから感じられる人間の愛情や悲哀は原作に劣らぬ奥深さを持っている。原作を文字の説明の無い短編アニメーションとして新しく作り出す上でのこれらの創意工夫は、原作に対するキャロライン・リーフ独自の視点を感じさせる。